



■ ワーキングプアから無縁社会へ

～放送現場で考える日本の社会と放送の役割～

■ NHK報道局社会番組部ディレクター

板垣 淑子 さん

NHKスペシャル「ワーキングプア」(2006年)から今年の菊池寛賞
受賞「無縁社会～無縁死3万2千人の衝撃」(2010. 1月放送)
まで、一貫して日本社会の矛盾を見据えて企画、制作。

1994年NHK入局。報道局首都圏部、仙台放送局、報道局番組部、スペシャル番組センターなど。
NHKスペシャル「エイズ感染爆発をどう防ぐのか」「調査報告日本道路公団～借金30兆円膨張の軌跡～」などの番組制作を担当。

- ・ギャラクシー賞・大賞、放送文化基金賞優秀賞、新聞協会賞など
- ・著書に「いのちの約束」ポプラ社 2010. 3 刊:「ドキュメントにつぼんの現場」から



■ 「無縁社会～“無縁死” 3万2千人の衝撃～」

自殺率が先進国の中でワースト2位の日本。NHKが全国の自治体に調査したところ、ここ数年「身元不明の自殺と見られる死者」や「行き倒れ死」など国の統計上ではカテゴライズされない「新たな死」が急増していることがわかってきた。なぜ誰にも知られず、引き取り手もないまま亡くなっていく人が増えているのか。「新たな死」の軌跡を丹念にたどっていくと、日本が急速に「無縁社会」ともいえる絆を失ってしまった社会に変わっている実態が浮き彫りになってきた。「無縁社会」はかつて日本社会を紡いできた「地縁」「血縁」といった地域や家族・親類との絆を失っていったのに加え、終身雇用が壊れ、会社との絆であった「社縁」までが失われたことによって生み出されていた。

また、取材を進めるうちに社会との接点をなくした人々向けに、死後の身辺整理や埋葬などを専門に請け負う「特殊清掃業」やNPO法人がここ2～3年で急増。無縁死に対して今や自治体に対応することも難しい中、自治体の依頼や将来の無縁死を恐れる多くの人からの生前予約などで需要が高まっていることもわかって来た。日本人がある意味選択し、そして構造改革の結果生み出されてしまった「無縁社会」。番組では「新たな死」が増えている事態を直視し、何よりも大切な「いのち」が軽んじられている私たちの国、そして社会のあり方を問い直す。(NHKスペシャル番組広報から)

NHKスペシャル「ワーキングプア」

～働いても働いても豊かになれない～2006.7.23 放送



- 働いても働いても豊かになれない…。どんなに頑張っても報われない…。今、日本では、「ワーキングプア」と呼ばれる“働く貧困層”が急激に拡大している。ワーキングプアとは、働いているのに生活保護水準以下の暮らししかできない人たちだ。生活保護水準以下で暮らす家庭は、日本の全世帯のおよそ10分の1。400万世帯とも、それ以上とも言われている。

景気が回復したと言われる今、都会では“住所不定無職”の若者が急増。大学や高校を卒業してもなかなか定職に就けず、日雇いの仕事で命をつないでいる。正社員は狭き門で、今や3人に1人が非正規雇用で働いている。子供を抱える低所得世帯では、食べていくのが精一杯で、子どもの教育や将来に暗い影を落としている。

一方、地域経済全体が落ち込んでいる地方では、収入が少なくて税金を払えない人たちが急増。基幹産業の農業は厳しい価格競争に晒され、離農する人が後を絶たない。集落の存続すら危ぶまれている。高齢者世帯には、医療費や介護保険料の負担増が、さらに追い打ちをかけている。

憲法25条が保障する「人間らしく生きる最低限の権利」。それすら脅かされるワーキングプアの深刻な実態。番組では、都会や地方で生まれているワーキングプアの厳しい現実を見つめ、私たちがこれから目指す社会のあり方を模索する。

- (NHKスペシャル番組広報から)